

□12月14日説教(隅野徹牧師)短縮版
「良い知らせを伝えよ」(イザヤ書40:1～11)

今回の中心箇所には6～7節を挙げさせていただきます。「良き知らせを伝える者は高い山に登って呼ばわれ」と神が語られます。民たちにとって、バビロン捕囚は苦しく、つらいものでした。しかしこの捕囚体験はイスラエルの民を、それまでの安易な選民思想から、神が自分たちを選ばれた理由を深く探求するという信仰に変えたと言われています。その中で、高い山に登って良き知らせを告げることが大切なこととして認識されたのです。

つまりは、神の恵みをイスラエル民族だけに留めず、広く世界に広める大切さが見つめられるようになったのです。もしも自国中心主義に立つならば、高い山に登る必要はありません。自分の身近なところだけでなく遠いところにいる人々にも、あまねく神の福音を伝える必要があるからこそ、高い山に登れと主なる神はおっしゃるのです。わたしたちもなるべく広い視野で、いろいろな人に神の愛と恵みを証してまいりたいと思います。

最後の11節も味わい深い御言葉です。試練の時、苦しみ時は終わり、慰めの時が来ることを神は預言者を通して告げられます。ここで描かれた主なる神は、詩編23編のように羊飼いと称して民たちを導くお方ですが、ただ導くだけでなく、迷いし者を懷に抱いて導く愛の羊飼いでもあります。これは旧約時代ではなく、神の独り子イエス・キリストがこの世に来てくださったことによって初めて成就したのです。

ヨハネ福音書10章で、ご自身をよい羊飼いに譬えられたイエス・キリストのお姿や、ルカ福音書15章の、迷い出た1匹を探し出す羊飼いでたとえられた、すべての人間の羊飼いであるイエス・キリストご自身の姿が、このイザヤ書40章11節で描かれているのです。このような神の愛を具体的に表して下さる救い主キリストが、この世に人間として来てくださいました。クリスマスの前に、その感謝をあらためて心に刻みましょう。(終)